



「虫めづる幼稚園」

園長 佐藤 淳穂

8月のある日、出先で私の携帯が鳴りました。「先生、大変です。園庭に鷹(タカ)がいます！」写真を送ってもらうと、くちばしの先が下に折れ曲がった独特の形で、カラスやハトとは明らかに異なっていました。確かにワシやタカの仲間に見えます。園庭の隅でうずくまっていて飛べない様子だと聞いて、怪我や病気、もしくは巣立ったばかりの子どもではないかと考えました。暑さで弱った小鳥の動画を観たことのある職員は、熱中症を疑って水を入れた器を置いたそうです。

そういえば、半年前の冬のこと、園内研究会で園庭の自然観察をしていた際、プロ・ナチュラリストの佐々木洋先生が遠くの空を指さして、「あ、ハヤブサです！」と教えてくださったことがありました。ビルの屋上の避雷針に留まっているその鳥が羽を広げて飛び立つと、ハトが一斉に逃げました。ハヤブサはワシやタカよりも一回り小さい猛禽類で、週に一度くらい狩りをして小鳥を捕食し、生態系の頂点となっていると聞いたことを思い出しました。おそらく、この鳥は「ハヤブサ」で間違いありません。



その時は、空高くにその影を見ただけでしたが、まさか本園に舞い降りてくれるとは驚きました。東京都環境局に問い合わせ、とりあえず様子を見ることになりました。ハヤブサは、体を引きずるようにしながら、奥へ奥へと移動していました。

翌朝、ハヤブサの姿はありませんでした。争った形跡もなく、羽も落ちていませんでした。遠くから見守っていた親鳥が迎えに来てくれたのかもしれません。無事に飛び立てたことを祈るばかりです。

それからというもの、私の日課に「ハヤブサ探し」が加わりました。今日も、きっとどこかから園庭を見下ろしているはずです。ハヤブサのお陰で私の視界がグーンと広がりました。虫を探して園庭に座り込むだけでなく、周辺の団地やビルの屋上をぐるりと見回すようになったのです。ハヤブサが小鳥を捕り、小鳥が虫を食し…いのちは園内だけでなく、周りの環境とつながっていることにあらためて気付かされました。

今、話題の展覧会「虫めづる人々」(サントリー美術館)では、江戸時代に描かれた虫にまつわる作品がたくさん展示されています。蛭狩りを楽しむ姿や虫かごを持つ子どもなど、歌麿や若冲の美人画や季節を感じさせる絵の中で、虫を愛し、生活の一部となっている様子が生き生きと描かれています。室町時代以前の硯箱や花瓶、櫛などに刻まれた装飾の中にも、バッタやカマキリ、チョウ、カエルやうずらなどが見られ、園庭で子どもたちが虫探しに心躍らせる姿と重なりました。

さあ、2学期が始まりました。暑い日が続く予想ですが、私たち人間も地球の仲間であることを感じながら、心豊かで学びの多い生活が送れるようにしていきたいと思います。今学期も、様々なご理解とご協力をよろしくお願いいたします。